

# 動詞の形態論的な形の内部構造について

鈴木重幸

(1) 動詞のような語形変化する品詞に属する単語は、具体的な文のなかではいくつかのことなる単語形式<sup>(注)</sup>として実現する。同一の動詞の単語形式は、品詞としての動詞(およびその下位の種類)のもつ形態論的な形の、その単語における実現形式であって、そこに実現している形態論的なカテゴリー(以下「カテゴリー」と略称)とそれの形態論的な形(以下「形」と略称)によって組織づけられている。動詞は複雑なカテゴリーの体系をもっているから、個々の動詞の単語形式は何じゅうにもかさなった形によって組織づけられている。たとえば、単語形式 yomô は yomu という動詞の完成相(アスペクト)、はたらきかけ(ボイス)、普通体(ていねいさ)、みとめ(みとめ方)、終止(きれつづぎ)さそいかけ(ムード)の形として位置づけられる。

(注) 鈴木1980b 参照

個々の動詞の単語形式の表現手段としての物質的な面(音声連続とそれにかぶさるアクセント)は、同音形式のばあいをのぞいて、その特定の動詞であることを表現しながら、同時にその動詞の特定

のカテゴリー(複数)の特定の形(複数)であることを表現しわけ。そのために、個々の動詞の単語形式は、syntagmatic にいくつかの形づくりの要素に分化している。いいかえれば、こうしたカテゴリーとそれの形を表現しわけのために、単語は内部に構造をもつのである。

こうした形づくりの要素として鈴木1972は語幹、語尾、くっつき、文法的な接語辞をみとめているが、今回、あらたに語基とよぶ単位をくわえたい。こうした形づくりの要素は単に表現手段の面(一定の条件のもとにある一定の音声連続)だけでなく、その内容の面(すなわち、特定の動詞であること、特定のカテゴリーの特定の形<sup>(注)</sup>であることを表現するやくわり)をもっていて、これらの二つの面の統一物とみななければならない。

(注) ふつう形づくりの要素としての語尾や接尾辞は、文法的な意味や機能をもつ(あるいは、あらわす)と説明されることがおおいが、こうしたことは条件的にいえることである。これらは、単語の形態論的な形の一段下位のレベル(形態素のレベル)

の単位であって、その内容的な面は、一段上位の形態論的な形の形成(形つくり)に参加して、その形の表現手段の面として機能することである。それぞれの形の文法的な意味や機能はまさにその形(およびその実現形式としての単語形式)の内容的な面である。

ここでは、規則的に語形変化する二つのタイプの動詞(いわゆる五段動詞と一段動詞)について、個々の形態論的な形の内部構造を記述的にとりあげる。(アクセントには今回はふれない。)用例には個々の単語の単語形式をあげるが、それはそれぞれのタイプの代表例であって、ここでは個々の動詞のちがいは問題としない。例外的なものには多少ふれるけれども、形の内部構造は、鈴木1972でもいちおうあつかっているが、ここであげるものはそれを修正したものである。おわりに、わたしの分析とことなる分析を紹介し、それ<sup>(注)</sup>についてのわたしの見解をのべようとおもう。

(注)ここでもちいるローマ字表記は原則として教科研・秋田国語部会1966による。

(2)あらかじめ確認しておかなければならないのは、同一の動詞の形態論的な形(単語形式)は paradigmatic な体系(カテゴリー)をなして、そのメンバーの一つが(それが同音形式であればはいは二つ以上でもありうるが)表現手段の面でおなじ体系内の他の積極的に特徴づけられた形との対立のなかで、消極的に特徴づけられているばあいがあるということである(いわゆる印づけられていない——unmarked な——メンバー)。たとえば、

mi-ru 見る  
mi-ta 見た  
mi-Ø 見ない  
mi-te 見て  
mi-reba 見れば  
:

のなかで、第一中止形 mi は、積極的な語尾をもっていないことで他と区別される(いわゆるゼロ語尾-Ø)。このばあい、第一中止形は表現手段の上で、つまり物質的に、特徴づけられていないというのではけっしてない。miru を例にとれば、それは mi という物質的な音声連続をもっているのである。なお、形式的に unmarked なメンバーは内容的にも unmarked であるということの意味するものではない。

(3)動詞の形態論的なカテゴリーには、テンス、ムード、きれつづき<sup>(注1)</sup>、みとめ方、ていねいさ、ボイス(たちば)、アスペクト(すがた)<sup>(注3)</sup>がみとめられる。このうち、テンス、ムード、きれつづきは、文のなかで特定の文法的な機能(位置)、および特定の機能(位置)においてのみあらわれる文法的な意味にかかわるカテゴリーであって、あたらしい意味での活用のカテゴリーとしてまとめられる。活用のカテゴリーの形を活用形とよんでおく。

(注1)鈴木1977参照。鈴木1972ではこのカテゴリーをみとめなかったために、「なかどめ(中止)」「条件」「逆条件」などをカテゴリーあつかいにするという混乱があった。

(注2) ボイスには他動詞、準他動詞(あい手の「一に」を要求する自動詞)の～スルの系列(はたらきかけ)と～サレルの系列(うけみ)がみとめられる。～サセルの系列は使役動詞、～サデキルの系列(「よめる」「かける」など)は可能動詞としてボイスからはみとめられる。鈴木1980 a 参照。

(注3) アスペクトには動きや変化をさしめず動詞の～スルの系列(完成相)と～シテイルの系列(継続相)がみとめられる。奥田1977参照。

活用以外のカテゴリーは、すべてそれぞれ二つの形からなりたつ。そのうちの出発点的な形は形式的に unmarked なメンバーである。

(unmarked)	(marked)
みとめ方(みとめ)mi-ru (うちけし)mi-na-i	
ていねいさ(普通体)mi-ru (ていねい体)mi-mas-u	
ボイス(はたらきかけ)mi-ru (うけみ)mi-rare-u	
アスペクト(完成相)mi-ru (継続相)mi-te i-ru	

mi-ru という形は、他の marked なメンバーとの対立のなかで、これら四つのカテゴリーのなかのみとめ、普通体、はたらきかけ、完成相の形である。

(4) 活用形は、基本的には

活用形	語幹 + 語尾
yom-	-u, -ò, -e, i, …

yomana- -i, -katta, -kereba…

という内部構造をもつ。語幹とは、原則として、それぞれの活用形に共通な要素であって、それらが特定の動詞の(活用以外の)特定のカテゴリーに属することを表現するやくわりをもっている要素である。語尾とは同一の(活用以外の)カテゴリーに属する個々の活用形を特徴づけるやくわりをもった要素のうち、基本的なものである。個々の活用形を特徴づける要素には、語尾のほかに、くつつきと接尾辞がある。

上の(3)にあげた、活用以外のカテゴリーの出発点的な形(みとめ、普通体、はたらきかけ、完成相の形)の活用形の語幹は基本語幹(注) (一次的な語幹)およびその変種としての音便語幹である。

(注) 鈴木1972ではこの用語を音便語幹から区別するために、強変化動詞にのみもちいているが、ここでは、うちけし語幹以下の二次的な語幹から区別するものとしてもちいた。

(5) 動詞は、表現手段の面からみた形つくりの上から、強変化(いわゆる五段活用)と弱変化(いわゆる一段活用)および特殊変化(いわゆるサ変、カ変)にわかれる。

強変化動詞は基本語幹が原則として子音でおわり、対応する語尾が母音ではじまるタイプである。古代語の強変化動詞のうち、語幹尾の子音が両くちびるの f であったもの(八行四段)は、現代語ではその f が規則的な音韻変化の結果、a- ではじまる接尾辞のつづくときには -w としてのこり、他のばあいには脱落している。

kaf-u > ka-u

kaf-i > kaw-i > ka-i

kaf-azu > kaw-ana-i

kaf-aru > kaw-are-ru

-fの脱落した語幹は語幹尾子音ゼロとみなすこともできる。このタイプの動詞は基本語幹が-Ø/-w-という二つの変種(allo-morph)をもっていることになる。これを簡略に-(w)-と表示することもできる。なお、古代語の-t(タ行四段)のタイプは現代語では、語尾-u, -iのまえで-ts-, はその他では-t-である。

kat-u > kats-u

kat-i > kats-i (tsは口蓋化している)

kat-ô

kat-e

一方、弱変化動詞は、基本語幹が母音(-iまたは-e)でおわり、語尾、接尾辞が子音または半母音yではじまるタイプである。

強変化

弱変化

yom-u kak-u ka-u mi-ru tabe-ru

yom-ô kak-ô ka-ô mi-yô tabe-yô

yom-e kak-e ka-e mi-ro tabe-ro

yom-i kak-i ka-i mi-Ø tabe-Ø

yom-eba kak-eba ka-eba mi-reba tabe-reba

(注) 弱変化動詞 kure-ruの命令形は例外で、kureである。

-(w)-のタイプの強変化動詞の語幹の(w)の直前の母音は、主として-a, -u, -oである。-eはない。-iは「いう」の一語であ

る。「いう」の現在未来形は語幹のi-と語尾の-uが融合してyu:<sup>(注)</sup>となる。

(注) このように語幹と語尾に融合がおこっても、全体としての単語形式は他の単語形式から区別されるから、機能の上ではかまわないわけである。なお、古代語の「ふぶ」wef-uは現在未来形が融合してwefu > eu > yo:となり、あたらしい語幹yo-が生まれ、それがすべての形でwef->e-にとってかわった。yo-u, yo-ô, yo-e...

強変化動詞はt-またはd-ではじまる語尾のまえでは、基本語幹のかわりに音便語幹があらわれる。音便語幹は起源的には語基(第一中止形と同音)であるが、現代語では、t/dではじまる語尾に対応する強変化動詞の基本語幹の変種(allo-morph)にくみこまれてい

(基本語幹) (音便語幹) (語尾)

I —s- (注) —si- (注) -ta, -te, -tara, ...

II —k- —i- -ta, -te, -tara, ...

III —g- —i- -da, -de, -dara, ...

IV —(s)- —(s)-

—r-	}	—t-	-ta, -te, -tara, …
—(w)-			
V —b-	}	—n-	-da, -de, -dara, …
—m-			
—n-			

(注) ik-u は例外で、音便語幹は it- となる。it-ta, it-te, it-tara, …

強変化動詞の基本語幹のおわりの子音は、語尾のはじまりの母音と音節をつくるが、音便語幹は、語幹尾で音節をとじ、t, d- でつぎの音節をひらく。語幹尾の—si, —i, —t, —ñ はリズムの単位としては1拍であるが、直前の音節に従属して、それと一音節的に発音されることがおおい。

(注) —t はかならずそうである。—si の母音は無声化している(この si は口蓋化した s' とみることができる)。—i と —ñ はその直前にアクセントのさがり目があるときには、まえの音節に従属している。

弱変化動詞には音便語幹はなく、対応する語尾 -ta, -te, -tara… は基本語幹につく。

(注) 起源的には、これと同音の語基である。(16)を参照。

(6) そのほかの活用形は(同時形をのぞき) <語幹+語尾> からなりたつ活用形にさらにくつつきをつけてつくられる。

yom-u=**darô**                      mi-ru=**darô**  
 yoñ-da=**darô**                      mi-ta=**darô**  
 (注)

yom-u=**to**                              mi-ru=**to**  
 yom-u=**nara**                              mi-ru=**nara**  
 yoñ-da=**nara**                              mi-ta=**nara**

(注) この自由な変種 yoñ-darô, mi-tarô の -tarô/-darô は語尾である。

なお、逆条件の語尾 -temo/-demo は第二中止形 + mo (くつつき) とみることも可能であろう。

くつつきとは、ここでは活用形のあとにさらについて、文法的な意味・機能の表現に参加する単語以下の要素(形態素)である。

同時形 yomi-nagara, mi-nagara は<語基+接尾辞 -nagara> と分析される。語基については(12)を参照。

(7) 普通体のうちけしの形は、基本的にはつぎのような内部構造をもっている。

うちけしの形  
 語基 + うちけし語幹 + 接尾辞 + 語尾

基本語幹+うちけしの接尾辞

(強変化) yom -ana -i, -katta, -kereba

kaw -ana -i, -katta, -kereba

(弱変化) mi -na -i, -katta, -kereba

tabe -na -i, -katta, -kereba

—(w)- のタイプの強変化動詞の語幹尾は -w である。うちけしの接尾辞は強変化 -ana-, 弱変化 -na- であって、二つの変種があるが、語尾は一樣である。語尾は形容詞の語尾にはば準じる。

aka-i	yomana-i	mina-i
aka-katta	yomana-katta	mina-katta
aka-kereba	yomana-kereba	mina-kereba
aka-kattara	yomana-kattara	mina-kattara

形容詞の中止形 aka-ku, aka-kute に相当する形は yomana-ku, yomana-kute であるが、これらの形は、yomanaku naru, yomanakute komaru などかぎられたばあいにはつかかわれない。ふつうの中止的な用法をもつ形としては、

- (第一中止形) yom-adzu(=ni) mi-dzu(=ni)  
 (第二中止形) mi-dzu(=ni) mi-na-i=de

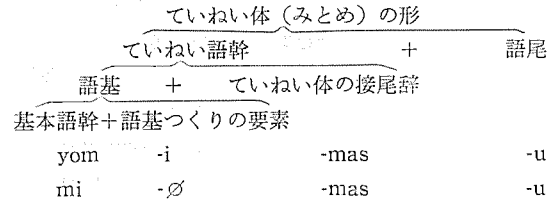
がもちいられる。-adzu/-dzu は文語的なうちけしの接尾辞であって、これをともなう形が第一中止形のうめあわせ suppletion として位置づけられる。この形はふつうくっつきの =ni をともなう。第二中止形は、現在未来形にくっつき =de をつけてつくられる。

形容詞にない命令形は、うめあわせの手つづきでつくられる。すなわち、うちけし語幹からではなく、みとめの動詞の現在未来形に禁止のくっつき =na をつけてつくられる。<sup>(注)</sup>

yom-u=na mi-ru=na

(注) この =na は、原則としてふつう体みとめの現在未来形にしかつかない点で、他のくっつきより、まえの要素とのむすびつきがかたい。この形は<基本語幹+接尾辞 -una/-runa> と分析する考え方もありうる。あとであげる清瀬1971, 城田1979などがそうである。

(8) ていねい体のみとめの形は、基本的につぎのような内部構造をもつ。



ていねい語幹は、基本語幹から直接つくられるのではなく、語基にていねい体の接尾辞をつけてつくられる。語基は本来単語つくりの要素であって(あとの(12)を参照)、強変化動詞では<基本語幹+i (語基つくりの要素)>であり、弱変化では基本語幹と同音である。

ていねい体の形は、歴史的には、あわせ動詞(いわゆる謙譲動詞)

yomimawirasu(ru)

からうまれたものであって、それが意味変化とともに表現手段もちぢまって、yom-u の形態論的な形にくみこまれるようになったものである。それともなうて、このばあいの yomi- は、形つくりの要素にもちいられるようになったとみなすことができる。

ていねい語幹を

yom-imas-

と分析しないのは、一方に yomi- という要素が現代語でも生産的な単語つくりの要素としてはたらいっているという事実があるからであり、さらにそれが yomimas- において形つくりの要素に転化し

たとみる歴史的な根拠があるからである。もしかりに yomi- という要素が生産力をうしなって、化石的な要素になっているとしたら、ていねい語辞は yom-imas- と分析すべきであろう。

これに対して、yom-ana-i を yoma-na-i と分析しなかったのは、現代語の形づくりと単語づくりのなかで、yoma- という単位をみとめる積極的な根拠がみとめられないからである。(なお、あとの(14)を参照)。

ていねい体の活用形は特殊な変化をする。

yomimas-u (おおくのばあい [yomimas])

yomimásita ([yomimas'-ta])

yomimasyó ([yomimas'-ó])

命令形は

yomi-nasai mi-nasai

であって、現在つかわれないあわせ動詞(いわゆる尊敬動詞)

yomi-nasaru mi-nasaru

の命令形が、うめあわせ的にもちられる(〈語基+接尾辞-nasai〉)。

さらに、推量形は、

yom-u=desyó mi-ru=desyó

yoñ-da=desyó mi-ta=desyó

のように、普通体の叙述法断定(現在未来/過去)の形にむすびのくっつき da のていねい体推量形 desyó をつけてつくられる。これも、うめあわせの手づつきによるものである。

(9) ていねい体のうちけしの形は、基本的につぎのような内部構

造をもつ。

	ていねい体のうちけしの形	
	ていねい体のうちけしの語幹 + 語尾	
	ていねい語幹+うちけしの接尾辞	
yomimas	-eñ	-∅
mimas	-eñ	-∅

この活用形はさらに特殊である。終止形叙述法断定現在未来は、語幹と同音である(語尾は -∅)。他の形は、この形にくっつきをつけたり、ふつう体のうちけしの形(活用形)にていねい体のむすびのくっつきをつけたりしてつくられる。

yomimaseñ
yomimaseñ=desita
yomana-i=desyó
yomana-katta=desyó
yomimaseñ=de
yomimaseñ=desitara
yomimaseñ=to

(10) 受けみのたちばのふつう体みとめの形は、つぎのような内部構造をもつ。

	受けみのたちばの形	
	受けみ語幹	+ 語尾
	基本語幹+受けみの接尾辞	
yom	-are	-ru

mi -rare -ru

ただし、—(w)-のタイプの強変化動詞は、—w-are-ruである。

うけみの形は、弱変化動詞と同様の活用形をもつ。また、うけみの形のていねい体、うけしめの普通体、ていねい体も、弱変化動詞のそれとおなじづくり方である。

yom-are-mas-u mi-rare-masu

yom-are-na-i mi-rare-na-i

yom-are-mas-eñ mi-rare-mas-eñ

うけみの形といた構造をもつ

yom-ase-ru

mi-sase-ru

は使役動詞（派生動詞）とみとめられる（鈴木1980 a 参照）。

(11) 継続相は、完成相（普通体、みとめ）の第二中止形と補助動詞 i-ru とのくみあわせによる分析的な形である。

yoñ-de i-ru mi-te i-ru

継続相の活用形、ていねいさ、みとめ方のそれぞれの形は、補助動詞 i-ru（弱変化）の形を変化させてつくられる。うけみの形の継続相は、くうけみの形（普通体、みとめ）の第二中止形 +i-ru>でつくられる。

(12) 以上、動詞の形態論的な形の内部構造をとりあげたが、単語は、さらに単語づくりの上で、単純語、複合語、派生語のタイプがあって、それに応じて、基本語幹は、語根、接辞（接頭辞、単語づくりの接尾辞）という単語づくりの要素からなる内部構造をもつ。

単語づくりは当面の対象ではないが、動詞に直接かかわるものにかぎって、簡単にふれておく。

単純動詞の基本語幹は、一つの語根だけからなりたつ。複合動詞のそれは二つの語根からなりたち、派生語のそれは一つの語根と接辞からなりたつ。

単純動詞の基本語幹 <語根>

複合動詞の基本語幹 <語根+語根>

派生動詞の基本語幹 <接頭辞+語根>

<語根+接頭辞>

単語づくりのタイプにかかわらず、強変化動詞が単語づくりの要素になるときに、基本語幹がもちいられるばあいと、<基本語幹+i>（第一中止形と同音）がもちいられるばあいとある。後者は、起源的には第一中止形とおなじだが、もはや形態論的な形ではなく、単語づくりの要素である。これをあらたに“語基 base”とよぶことにする。<sup>(注)</sup>弱変化動詞の語基は、その第一中止形と同様、基本語幹と同音である。

(注)「語基」という用語にはまだ定着した内容がない。服部四郎1951、野村1977などでもちいられている。

動詞的な語根は、単純動詞の基本語幹（語幹的な語根）および単純動詞の語基（語基的な語根）の二つの形をとってあらわれる。<sup>(注)</sup>このあらわれ方は、単語づくりのタイプによってきまっている（——は前者、~~~~は後者）。

yom-u tor-u age-ru



yomi-tor-u    tori-age-ru

ugok-u    ugok-as-u

kudak-u    kudak-e-ru

tsuk-u    kut-tsuk-u

yomi-te    yomi-kata    yomi-kaki

haya-yomi    hoñ-yomi

(注) この「形」は形態論的な形のことではない。

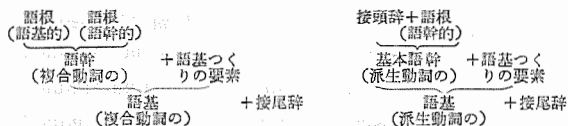
弱変化動詞も、強変化のタイプにあわせて、同音の語幹的な語根と語基的な語幹が区別される。

mi-ru    mi-age-ru    kaeri-mi-ru

mi-tor-u    mari-nage

複合動詞、派生動詞が単語づくりの要素となるばあいには、たとえば、つぎのような内部構造に分析される。

yobi-das    -i    -niñ    kut-tsuk    -i    -kata



(13) 以上あげた形づくり、単語づくりの要素を整理すると、つぎのようになる。(分析的な形の要素をのぞく。)

<形づくりの要素>

語幹…活用形に共通する要素。特定の単語の特定の(活用以外の)カテゴリーの形であることを特徴づける。

基本語幹(音便語幹), うちけし語幹, ていねい語幹, ていねい体のうけけしの語幹

語尾…語幹のあとについて、個々の活用形を特徴づける要素(くつつき, 接尾辞をのぞく)

くつつき…特定の活用形のあとについて、それとべつの活用形をつくる要素

接尾辞(形づくりの接尾辞)

(i) 語幹あるいは語基のあとについて、二次的な語幹(うちけし語幹以下)をつくる要素

(ii) 基本語幹について、他の(活用以外の)カテゴリーの特定の活用形を特徴づける要素(-adzu/-dzu)

(iii) 語基について特定の活用形を特徴づける要素(-nagara, -nasai)

語基 → 単語づくりの要素

<単語づくりの要素>

語根…複合語、派生語の基本語幹をつくる要素で、単独で単純語の基本語幹になることのできる要素、(動詞的な語根には語幹的な語根と語基的な語根の二つの形がある)

語基…動詞が単語づくりの要素としてつかわれるときにとる(基本語幹以外の)特別な形

基本語幹→形づくりの要素

(14) わたしは以上のように強変化、弱変化動詞の形態論的な形の内部構造を分析するが、これについてはいくつかの異説がある。そ

の代表的なものをとりあげて、それに対するわたしの見解をのべる。

宮田幸一1948の動詞の章は、ローマ字でわかち書きする単位を単語とみとめることによって、ヨーロッパ語における word に相当する日本語の単語を基本的な単位とする文法論を展開し、いくつかのカテゴリーのもとに動詞の形態論的な形を組織づけたものであって、わたしの文法研究の出発点の一つである。ところが、その活用形、派生動詞の内部構造の分析は、かな文字による従来の分析の影響をつよくのこして、過渡的な性格をもっている。

宮田は、活用形のうち、

hanasi, hanasu, hanase

と

hanasi-ta, hanasi-te, hanase-ba

の接尾辞 -ta, -te, -ba をとりのぞいた部分とを語幹とよび、否定の形および派生動詞の

hanasa-nai, hanasa-reru, hanasa-seru

の接尾辞をとりのぞいた部分を「語根として用いられた語幹」とみる。つまり、学校文法での六つの活用形はすべて語幹（語根）である。語幹のおわりの変化する母音を「語幹尾母音」と名づける。

（hanasô は語幹と接尾辞が融合してしまって、その境界があきらかでないものとみなされている。）このような見解について、宮田は二つの根拠をあげている。

第一に、日本語の音韻組織からみると、hanas-u, hanas-e, hanas-

i のような分析は行きすぎであるという(p, 22)。たしかに、日本語の syntagmatic な音韻組織は、基本的に CV|CV|CV|…であり、(母音の無声化をべつにすれば,) つまる音、はねる音以外は、すべて開音節であって、子音は原則としてつぎの母音と一体となって発音される。音声学の知識やローマ字がきの経験がないばあい、子音と母音を分離して意識することはふつうでない。

しかし、日本語の音声においても、単音（音素）と音節という二つの単位があって、それぞれの単位の基本的な性質は、他の、閉音節が一般的な（語形変化をもつ）言語とことならない。すなわち、音声連続は単語形式の、感覚器官でとらえられる物質的な面をなして、単語形式をその面で同定 identify したり区別したりする機能をもったその最小の segmental な単位は、単音（音素）であって、音節ではない。音節は、その厳密な規定には諸説があるにしても、そうした単音からなる音声連続の発音上の最小の segmental な単位である。単音は、それぞれの言語に固有な配列上の制約のもとに、単語形式の物質的な面としての音節あるいは音節結合のなかに実現する。単音（母音、子音、半母音）は音節を特徴づける同時的な非 segmental な属性ではなく、音節を構成する継起的な segmental な単位である。語幹と語尾、接尾辞は、単語の形態論的な形（単語形式）の形つくりの上ではたすやくわりから分析された要素であって、発音の上から分析されたものではない。したがって、そのさかい目が音節のさかい目にある必要はない。そして、ほかならぬ強変化動詞の内部構造がこのことをしめしているといわな

なければならない。

第二に、宮田は、hune→huna-de, huna-nori; sake→saka-daru, saka-ya など一部の名詞において、単語づくりのさいに基本形の末尾の母音が e → a と交替する現象（いわゆる転音）をひきあいに出している(p. 22)。しかし、名詞の転音と強変化動詞の活用形にみられる末尾の母音の交替とは事情がことなる。すなわち、強変化動詞の基本語幹 yom-, yob-, yos-, yor-, yo(w)- は、それをふくむ形がそれぞれ特定の動詞「よむ、よぶ、よす、よる、よう」であることを特徴づけている。ところが、転音のおこる名詞の末尾の母音をとりのぞいた部分 hun-, sak- は、それぞれの単語を他の単語から区別して特徴づけるやくわりをもっていない（語根でも語幹でもない）。そして、強変化動詞の活用形の末尾の母音 -u, -e, -i は、それぞれ特定の活用形を特徴づけていて、それをとおして、特定の文法的な意味や機能の表現に参加している（語尾）。これに対し、hune, sake の -e, huna-, saka- の -a は単語づくりの上で条件づけられている（後者は複合語、派生語のまえ要素の語根としてのみあらわれるなど）けれど、けっして単語づくりの上のやくわりだけをになっ  
てるとみることではできない。これらの母音は、語根の内部の部分であるからである。したがって、hune, seke と huna-, saka- とは名詞的な語根における二つの変種であって、転音は、名詞的な語根の末尾の母音の交替現象ととらえなければならない。<sup>(注)</sup>これを強変化動詞の母音語尾の変化と同一視することはできない。

(注) 語根の内部の部分の母音の交替という点では、英語の foot

→feet, tooth→teeth, run→ran, come→came などの母音の交替とくらべることができる。これらの母音を接中辞 interfix とみことは無理であろう。

宮田は、一段動詞については、

mi- tabe-

のような、末尾の母音の交替しないみじかい語幹と

miru taberu

miro tabero

mire-(ba) tabere-(ba)

mira-(reru) tabera-(reru)

misa-(seru) tabesa-(seru)

のような、末尾の母音の交替するながい語幹とをみとめている。

miru, miro など、単独で活用形であるものを語幹とみとめること

は、yomu, yome を語幹とみとめることと同様、問題であり、さ

らに、-ba, -reru, -seru のそれぞれにつづく三つの語幹をみとめる

必要があるかという点で問題である。後者についていえば、われわれ

の分割(mi-reba, mi-rareru, mi-saseru)も音節のさかい目でな

されるのである。後者については、宮田は、第三の根拠として、お

なじやくわりをはたす接尾辞を二種たてなくてすむということをあ

げている(p. 70)。yoma-nai, mi-nai という分割もこれにかな

っている。しかし、これらの形を他の形から区別して特徴づけているの

は、それぞれ下の下線部である。

yom-u mi-ru

||  
||

yom-ana-i      mi-na-i

yom-are-ru      mi-rare-ru

yom-ase-ru      mi-sase-ru

形の内部構造の分析は、なによりもまず同一の動詞（同一の形つくりのタイプの動詞）に属する形の paradigmatic な体系のなかで、それぞれの形を特徴づけて、それ以外の形から区別するやくわりをもった要素を分析することでなければならない。タイプのことなる単語の同一の形を特徴づけている語尾や接尾辞がことなる音声連続であられる現象はめずらしいことではない。<sup>(註)</sup>

(注) たとえば、ドイツ語の不定形の語尾

sag-en, geh-en; sammel-n

をくらべよ。

日本語においても、命令形からは共通の音声を取りだすことはできない。

yom-e      tabe-ro

服部四郎1951(新版1979)も、kaka-, kaki-, kaku, kake-, kakôを語幹、-nai, -masu, -ba を語尾とみとめるべきだと主張している。これについては、すでに奥田1952による原則的な批判がある(鈴木1972. p. 269 参照)。

(15) すでにのべたように、強変化動詞の基本語幹は、(歴史的に脱落したものを例外として) 子音でおわり、それに直接つく語尾、接尾辞は母音ではじまる。一方、弱変化動詞の基本語幹は、母音でおわり、語尾、接尾辞は子音(または半母音 y-)ではじまる。その

ために、それぞれおなじやくわりをはたす語尾、接尾辞は二つの変種 (allomorph) がある。

(i) 弱変化の語尾、接尾辞が強変化の語尾のまえに子音(半母音)をともなるもの

yom-u      mi-ru

yom-ô      mi-yô

yom-eba      mi-reba

yom-are-      mi-rare-

(yom-ase-)      (mi-sase-)

(ii) 強変化の接尾辞が弱変化の接尾辞のまえに母音をともなるもの

yom-ana-      mi-na-

(yom-i-mas-)      (mi-mas-)

(iii) 共通部分のないもの

yom-e      mi-ro

yom-i      mi-∅

清瀬1971はこのような点に注目して、(i)の弱変化の変種にみられる r, y, s, を“連結子音”, (ii)の強変化の変種にみられる a, i を“連結母音”と位置づけた。城田1979も、こまかい点は別として、清瀬の見解をうけついで、これらを“結合子音”, “結合母音”とよんでいる。清瀬も城田も、この種の子音、母音を接尾辞(清瀬), 助辞(城田)に従属する要素とみているが、一方で共通部分だけを接尾辞、助辞とよんで、こうした子音、母音を接尾辞、助辞からきり

はなしているふしがある。<sup>(注)</sup>

(注)たとえば、清瀬は、〈子音ではじまる接尾辞〉という用語で、共通部分が子音ではじまる接尾辞を一括している。城田も同様である。

しかし、こうした子音(半母音)や母音(語基つくりの要素である*-i*をのぞく)は、一方の変種の語尾、接尾辞のはじまりの音であって、語尾、接尾辞内部の音声である。その音声は、たしかに形態論的な形(単語形式)の音節や音節結合を構成する上で、つまり発音の上で一定のやくわりをはたしている。しかし、だからといって、こうした子音や母音が語幹と接尾的な要素とを連結(結合)するやくわりだけをはたしているとみることはできない。むしろそうした発音上のやくわりをもはたしているとみるべきだろう。そうした発音上のやくわりは、こうした子音や母音をともなわない変種のはじめの母音や子音もはたしているのである。yom-are-の*a*がなければ、yom-re-となって、発音できないだろう。mi-na-の*n*がなければ、mi-a-となって、発音しにくい。これは、mi-yôの*y*をとりさったmi-ôと同様である。

したがって、こうした子音や母音を連結(結合)子音、連結(結合)母音とよぶとしても、それはきわめて条件的なものである。わたしは、そうした子音や母音をともなう変種とともなわない変種をまとめておく方がよいとかがえる。なお、こうした変種を表示する簡便な方法として-are/-rare、-ana/-naのかわりに、-rare、-anaとか-(r)are、-(a)naとかで表示することは一向にかまわな

いだろう。

清瀬も城田も、第一中止形の語尾(接尾辞、尾助辞)は、連結(結合)母音*i*をともなうゼロ接尾辞(ゼロ尾助辞)と解釈することになるが、強変化動詞にあらわれる*-i*はなにものをも連結していない。しかも、この*-i*は他の語尾*-u*、*-e*、*-ô*と対立しながら、積極的に第一中止形を特徴づけている。これもこうした考え方の矛盾のあらわれだろう。

こうした語尾と接尾辞に二つの変種があることは、形態論的な形の歴史的な成立過程をあきらかにすることによって説明されなければならない。現在のところ、部分的にせよ、それが歴史的に説明できるのは*-yô*の*y*だけである。

なお、清瀬も城田も、yomimas-の*-i-*も、*-mas*に属する連結(結合)母音とみなしているが、これは機械にすぎるとおもわれる(上の(8)を参照)。

(16)わたしはyoñda, kaitaなどを〈音便語幹+語尾〉とみるが、これらの形をこうした語幹をたてずに、yomita, kakitaの連声samdhi(清瀬1971)、変形(城田1979)として、yomita, kakitaからみちびきだす考えがある。

これらの形は、歴史的には、  
yomitari kakitari  
というアスペクト的な形あるいはアクチオンズアルト的な動詞にさかのぼる。平安末期ごろに生じた音便現象によってその〈語基+接尾辞-tari〉が融合してyoñdari, kaitariとなり、語基のおわりの

音節が変化して、さらに yoñdaru, kaitaru をへて、意味変化とともに接尾辞末尾の音節が脱落して活用の体系のなかにくみこまれたものである。それによって、あたらしい語幹（音便語幹）と語尾に再編成されたものである。（これと並行して、弱変化動詞においても、〈語基+接尾辞 -tari〉から〈基本語幹+語尾 -ta〉に再編成されたとみなされる。）これらを現代語にも存在しないし、歴史的にも存在しなかった yomita, kakita からみちびきだそうとするのは無理である。音便語幹と基本語幹の関係は（5）であげたように規則化できるが、音便語幹をふくむ形のなりたち（-mi の撥音化、-ki の k の脱落など）は歴史的に説明しなければならない。

なお、音便語幹をとる形は yoñd-, kait- までが共通であるから、形式的には、これらを語幹とみとめて、基本語幹の形と対応させることも可能である。

yom-u	yoñd-a
yom-ó	yoñd-aró
yom-i	yoñd-e
yom-eba	yoñd-ara
—	yoñd-ari

しかし、yoñd-, kait- に共通の意味的な特徴をみいだすことができないので、これらを語幹とみなすことは無理である。これらの形を特徴づけているのは、<sup>(注)</sup> -a, -aró …ではなく -ta/-da, -taró/-daró …である。音便語幹は、強変化動詞の基本語幹の、-t/-d ではじまる語尾につづくさいのかわり語幹（変種）と位置づけるのが適当だ

とかんがえる。

（注）これらのペアに〈未完了（未了）/完了〉の対立をみとめる人もいるけれど、これらの形を基本的にそうした意味で対立する形とみとめることはできない。

#### 〔文献〕

- 奥田靖雄 1952「日本語動詞の語幹について」（『コトバの科学』7号）  
 —1977「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」（宮城教育大学『国語国文』8。のちに松本泰文編1978『日本語研究の方法』（むぎ書房）に所収）  
 教科研・秋田国語部会1966『にっぽんご5 発音とローマ字』（むぎ書房）  
 清瀬義三郎則府1971「連結子音と連結母音と—日本語動詞無活用論—」（『国語学』86）  
 城田 俊 1979「国語動詞の活用（語形変化）」（北海道大学文学部『人文科学論集』16号）  
 鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』（むぎ書房）  
 —1977『日本語文法・形態論』の問題点（『教育国語』51）  
 —1980 a 「動詞の「たちば」をめぐって」（『教育国語』60）  
 —1980 b 「品詞をめぐって」（『教育国語』62）  
 野村雅昭 1977「造語法」（岩波講座『日本語』9, 岩波書店）  
 服部四郎 1951『音韻論と正書法』（研究社, 新版, 大修館書店 1979）  
 宮田幸一 1948『日本語文法の輪郭』（三省堂）